京都とアートホテルその蜜月

ただラグジュアリーなだけでなく
滞在を特別なものにするアートホテル。
そのなかでも独自のアートホテルが点在する京都から
厳選した4つの宿を紹介する。
それぞれに映し出すアートのカタチとは?

photographs / Shinichi Tomikawa

建物・食事・体感――唯一無二の宿泊がここに。

MUNI KYOTO
ムニキョウト

京都、嵐山。旧くは平安貴族の別荘地であり、いまに続くその勝景は歌川広重の「六十余州名所図会 山城 あらし山 渡月橋」をはじめとしたさまざまな絵に描かれ、詠われている。

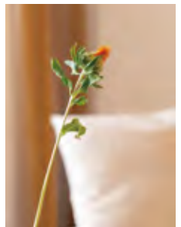
その渡月橋のたもとに門を構えているのが<MUNI KYOTO>(以下、MUNI)。和と洋が融合したモノトーンの建物は桂川と平行に建てられ、モダンでありながら嵐山の風景となじむ。

旅行客も多く賑いをみせる同地だが館内へと足を踏み入れると静寂に包まれ、凛とした空気へと変わる。ミニマルな作りのフロントには稲田宗哉氏の「無二」の書が掲げられることで場が引き締まり、安藤雅信氏の水琴窟が深く美しい音色を奏でる。そこから眺める「白庭」と名付けられた中庭は白石が敷き詰められ、松の輪郭がくっきりと浮かび上がる。その姿は陽の移り変わりで様々な表情を贅沢に映し出す、まるで生きている日本画のよう。

白眉なのは客室へと入ったときの風景だ。扉を開けた瞬間、一直線に眼に入るのは床から天井まで大きくとられた掃き出し窓。1階の客室では主庭の自然が借景として切り取られ、鮮やかに飛び込んでくる。ロビーから眺める白庭に対し、黒庭とされた主庭には四季折々の草花が植えられていた。訪れたのは新緑が始まる季節であったが、秋には紅葉の彩、降雪の時期には水墨画のような景色を楽しませてくれることだろう。

掃き出し窓を開け、専用バルコニーに出ると主庭の水が足元をくぐる。この特別な時間を体感できるのは1階の部屋ならではの醍醐味といえる。

MUNI KYOTO by 温故知新
京都府京都市右京区嵯峨天龍寺芒ノ馬場町3番
☎ 075-863-1110 (10:00 – 19:00)
https://muni.by-onko-chishin.com/



2階の部屋からは嵐山、桂川、渡月橋が一望できた。季節による日々折々の表情だけでなく、宿泊しなければ見ることができない早朝の景色など心豊かな時間も流れる。また、2階の部屋は天井が高く取られていることで窓を開けたときの開放感も気持ち良い。館内での光や窓の使い方も和洋の建築方式が取り入れられ、建物全体における設計の妙を感じられる。

宿泊者は隣接する福田美術館へ無料で訪れることができるほか、開館30分前から入館できる無料プランや1組限定で閉館後の美術館を案内してくれるオプショナルサービスもある。日本画を中心としたコレクションだけでなく渡月橋を望む併設のカフェも楽しみのひとつ。

MUNI には3つの景観を楽しむ部屋が用意されている。前ページで紹介した1階のガーデンビュー、その2階にある渡月橋と嵐山の景観を眺めることができるリバービュー、そして3人〜4人以上で宿泊ができるメゾネットだ。メゾネットタイプ以外は基本的な作りこそ変わらないが、リピート客は季節と気分によって1階と2階の客室を指定し、嵐山の風情を楽しんでいるとのこと。

たしかに、2階の客室ベランダから一望できる嵐山と渡月橋の眺望はここでしか見ることができない風景。なかでも全21室中、ひとつしかない2階のプレミアコーナーツインは渡月橋にもっとも近い部屋となり、この部屋を指定するゲストが多いのも頷ける。

MUNIの素晴らしさはその風景だけではない。じつは客室にも細かな芸術的エッセンスが取り込まれている。たとえば、客室の壁は「白」で統一されているが、ベッドサイドの壁面は西洋の「スタッコ・アンティコ」仕上げ、その反対側は和の「漆喰」で仕上げてあるなど、滞在する体験すべてにおいて嵐山は世界遺産や文化遺産が点在する芸術・文化の要所であることを改めて認識させてくれるのだ。

ふとソファの近くの一輪挿しに目を落とす。そこに置かれていたポストカードは歌川広重の浮世絵「六十余州名所図会 山城 あらし山 渡月橋」。広重が描いた場所に悠久の時を経て自分が滞在できることの特別感を感じられる素晴らしい演出だ。

アラン・デュカスが京都で創り出す コンテンポラリーキュイジーヌ

史上最年少でミシュランの星を取り、異なる国で3つ星を獲得した世界初のシェフである「アラン・デュカス」。その名を冠した＜Muni Alain Ducasse＞では、愛弟子であるアレッサンドロ・ガルディアーニが陣頭指揮を取る。シャガールなどが飾られる店内でサーブされるキュイジーヌは京都のみならずあらゆる日本の食材とフレンチの技法を組み合わせた逸品でミシェラン1つ星を獲得。また、桂川の景観を眺めながら朝食・ランチ・ティータイムを楽しめる＜MUNI LA TERRASSE＞も展開し、あえてフランス料理をベースに嵐山の文化と融合させていく姿勢は心躍る。

老松は、明治41（1908）年に「有職菓子御調進所」として上七軒で創業した京菓子屋。上七軒は京都でも最も歴史の古い花街だ。MUNIで体験した後に嵐山店にある茶房にてわらび餅などをいただくのもいいだろう。

MUNIが唯一無二である理由。それは宿泊だけではない。MUNI独自のオプショナルプランも宿泊時にはぜひ利用したい。なかでも京菓子の老舗“老松”の職人が自室に訪れ、目前で和菓子を創り上げるプランは出色といえる（宿泊者のみ1日2組限定）。

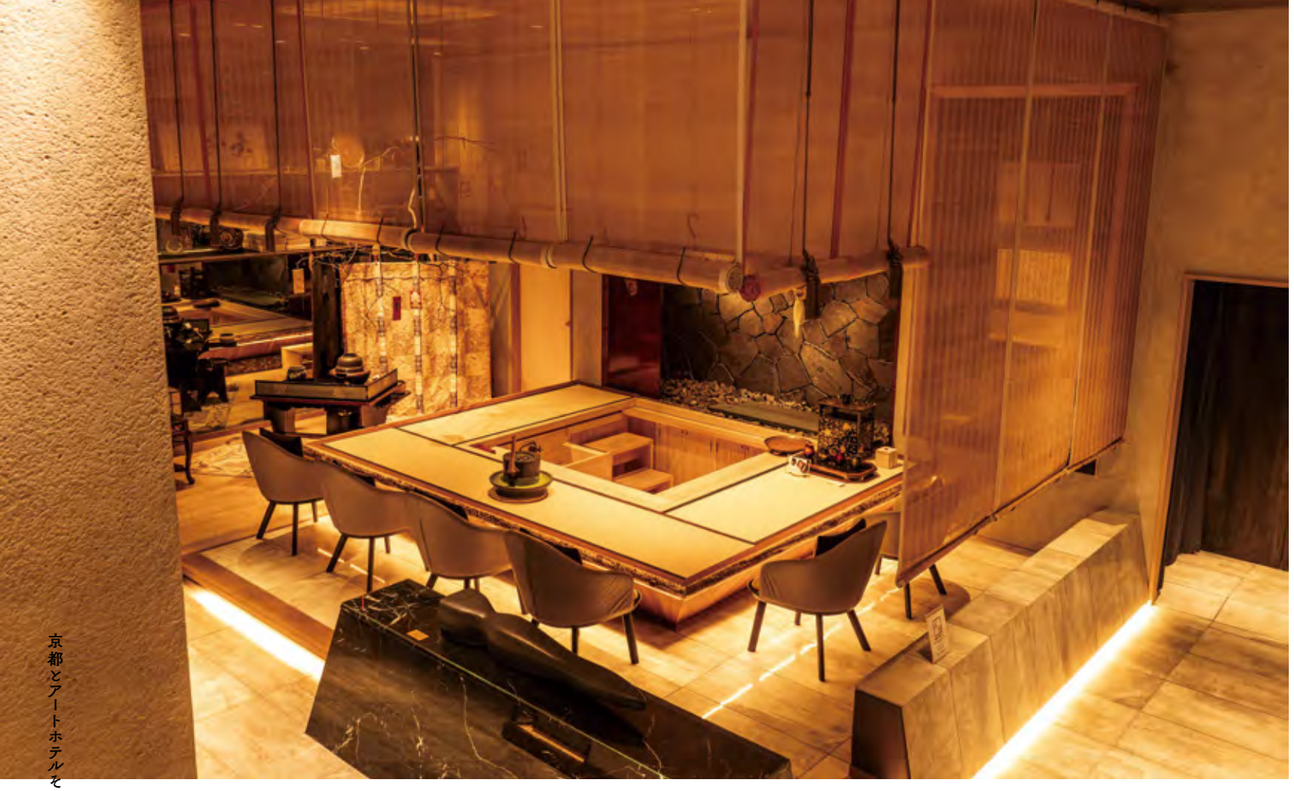
季節の風物などを写しとられる上生菓子「練り切り」がどのように作られるのか。そのお話とともに職人の手のなかで、まるで魔法のように、そしてアート作品のように美しく創られていく様子を独占して鑑賞できるのはあまりに贅沢。そして、出来立ての和菓子だからこそ味わえる食感と上品な甘さは至福の瞬間だ。

ほかにも、京都の街並みをヘリコプターで遊覧できるプランや、時期によっては世界遺産である天龍寺へ一般参拝時間前に訪問し、まだ参拝客がいない曹源池庭園と法堂『雲龍図』を特別に観ることができるなど嵐山だからこそ体験できるプランが用意されている。

MUNIでは今後も新しい体験プランを充実させていく予定があり、取材時にも嵐山の伝統文化に根ざしたアーティスティックな新しい企画があることを担当者の方からお聞きした。

MUNIは心と体を休めるホテルである一方で、ここでしか体験できない感性を刺激する場所でもあるのだ。

創業116年の老舗“老松”の職人が目前で創り上げる造形



ART MON ZEN KYOTO

アール モンゼン キョウト

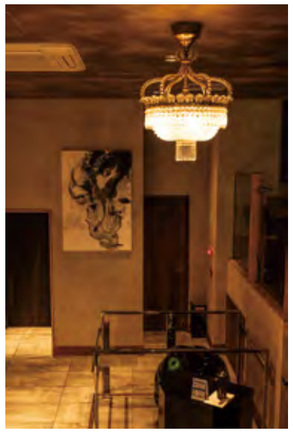
ここには目の届く範囲、手の届くところに歴史的な美術品や骨董品が置かれている。だが、美術館ではない。「アートをもっと身近に感じてほしい」という願いと共に生まれた驚愕のアートホテル、＜ART MON ZEN KYOTO＞だ。

この地に訪れると、まず「天外」という場所へ通される。そこは御簾に囲まれ、床より一段あがったところにある。眼の前に広がる畳敷きの卓子。それにあわせて設えた椅子は卓子の畳で正座するときの目線に合わせたものであり、そこに座れば茶室のようでいてそれとも違う特別な空間にいるように感じられる。実際、この卓子はすべて畳敷きにすることで、ときには茶室として、ときには能舞台になるなど、さまざまな用途として使われるとのことだが、どのような形であっても「天外」がもつ精神性を昇華できるに違いないだろう。

そこで点てられるお茶は、実際にこのホテル内で挽かれたものであり、お茶菓子も専属パティシエのオリジナル。京都ならではのもてなしの心と雰囲気に心が洗われ、余分なものが削ぎ落とされていく気分になる。

ふと顔を上げるだけでもさまざまな美術品が目に入る。天井にはオールドバカラのシャンデリア、その下には現代美術や中国 明時代の美術品などが大胆に、しかしバランスよく備えられている。とりわけ、掛け軸は取材時にかかっていたのは江戸時代のものであったが、季節だけでなくイベントや来賓客に合わせて変わることもあるそうだ。ほかにも目に入る美術品を「あれはなんだろうか」と想像し、実際に近くに寄って体験できる好奇心と自身の知見が蓄えられていくことが楽しい。重ねて言うが、ここは美術館ではない。ホテルなのだ。だが、これはこれから始まるめくるめくアートの色相のはじまりにすぎない。

古今東西、至極の美術品と宿泊する贅沢



客室の展示品のなかには誰もが知りうる美術品や歴史の遺物など博物館・美術館級のものが数多くある。実際に美術館や博物館が所蔵品を借りにくることもあるという。（上段中）ロビーにある5つの指をもつ龍図。この龍は清の皇帝のみが使用を許された最高位のものであり、実際に飾られているのは清の皇帝が使用した紙だ。（下段右上）バーに掲示されているものも夏目漱石の「猫の画」や棟方志功の絵画など、観るだけで心を充足してくれるものばかりだ。（下段中下）貸し切りの個室も用意され、アートの話題で飲むのには最高の場所だ。

ART MON ZEN KYOTOの各客室には、その部屋に合った美術品がガラス張りの展示ケースでディスプレイされている。それも、ただ置かれるのではなく、解説文と専用のスポットライトが用意されており、まさに美術館に宿泊していると言っていい。そのこだわりはとてつもなく、部屋のどこにいても美術品が眺められるように設計されている。それはお風呂に入っていたとしても、だ。

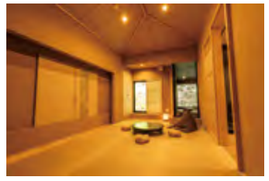
では客室そのものはどうか？　すべての部屋にある家具は、このホテルのためだけに作られたオリジナル。それもソファにはオランダ製＜カルッチ・ディ・キファソ＞のファブリックを使用し、カウンターも榧の木やウォルナットを使ったワンオフの“特別仕様”。まさに細かな部分までその哲学が行き届いている“神は細部に宿る”を体現するホテルなのだと畏敬の念すら感じてしまう。

客室そのものが美術品と同じくオンリーワンのクオリティであり、それを裏付けるお話を担当者の方からお聞きした。このホテルを建てる際には「作りたいものを作る」ために「予算を決めなかった」のだという。そして、究極はこのホテルそのものが、じつは数寄屋造りを建てていた棟梁が初めて手掛けた洋建築なのだという。よく見ると壁と天井の「漆喰」、床には「なぐり」など、あらゆるところに数寄屋建築の技法が凝らされているのがわかる。古今東西和と洋、さまざまな美術品が調和する巨大な海に迷い込み、その波に身を任せるような気持ちよさ。世界中を探しても、こんなホテルはどこにもない。

ART MON ZEN KYOTO
京都市東山区古門前通大和大路東入元町 391 番地
☎ 075-551-0009
https://www.amz-kyoto.jp/

すべてが規格外のアートルーム
非日常の空間を五感で味わう

回廊を挟んでふたつある浴室は、どちらもこの世にひとつしかないもの。ひとつは全面アクリルで透明。虹が輝き、光が乱反射するなか浮かぶように入湯できる。もうひとつは左官職人、久住章氏がゼロベースから積み重ね、削りあげたハンドメイドのものだ。湯船、床、柱それぞれに作りが違う。



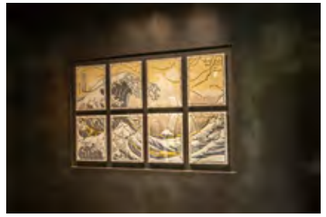
アートルームという先鋭的な部屋でありつつも、細かで温かな居住空間が両立。ゆったりとした時間が流れる。

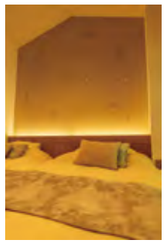
すみや亀峰菴
スミヤキホウアン

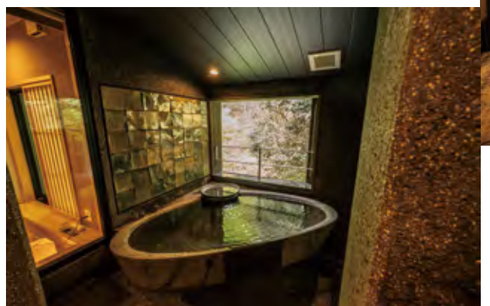
茅葺きの大門。和風の建物。だが、中に入ると和洋が調和した漆黒の鉄板と漆喰の空間が広がる。そこはロビーでありアートギャラリーでもある「百代」。このロビーのデザインとプロデュースをおこなったのはヴェネチア・ビエンナーレでアペルト部門を日本人で初めて受賞した芸術家、柳幸典氏だ。360度、すべて計算し尽くされたその空間は「キューブ」をモチーフにしたもので、窓から入る陽光と室内の明度が心を落ち着かせる。そのロビーからコンセプトが連続的に続く部屋こそがアートルーム「呼風」。

柳氏のコンセプトのもと陶芸家石井直人氏、帯匠十代目山口源兵衛氏、左官職人久住章氏、和紙職人ハタノワタル氏などの作家・職人たちが技術を駆使し、創りあげた部屋。そのベースとなったものは三島由紀夫の詩「イカロス」であり、足を踏み入れると一気にアートの世界へと吸い込まれるような回廊が待っている。回廊を軸に展開される各部屋は多くの驚きと感性を刺激してくれるが、過ごしやすさと快適性が同居しているのは伝統あるすみや亀峰菴だからこそ。それはまるでアートの胎内にいると言っても過言ではない。

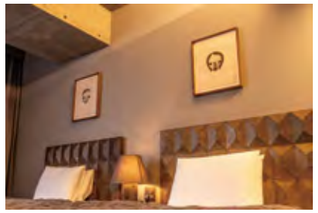
もうひとつ、ならではの特徴として、このすみや亀峰菴にオーストリアワイン大使のソムリエがおり、日本で一番オーストリアワインを提供する旅館だということがある。オーストリアは古くから高品質のワインを産出。特に近年ではビオワイン・オーガニックワインとして世界から注目を集め、その味わいは自慢の日本料理と非常にマッチングする。視覚と感覚だけでなく、味覚も満たしてくれる、まさに五感を味わう宿だ。







すみや亀峰菴
京都府亀岡市ひえ田野町柿花宮ノ奥25番地
☎ 0771-22-7722
https://www.sumiya.ne.jp/



node hotel
ノードホテル

コンセプトは「アートコレクターの住まいのようなホテル」。たしかに部屋にテレビはなく、ベッドと椅子、そしてバスルームが備えられている上品なゲストルームのようだ。しかし、そこにはアートと向き合うミニマルな場所が存在する。

部屋に入室したとき、バスルームから出てきたとき、就寝起床時。壁に掛けられたアートが常に自分の視界へと入り、“アートがそこにあること”が自然の風景となっていく。また、廊下にも絵画から立体物までさまざまな作品が置かれているほか、自室のワーキングデスクに置かれている本の中には飾られているアーティストの作品集があるなど、ちょっとした時間のなかでも、アートと自分の距離が縮まるような心遣いもうれしい。

1階のレストランはギャラリーと併用。ローカルのゲストで賑わうが、夜からのディナータイムでは海外の方も多く集うなど様相が変わる。アートと共に飲食を酌み交わす。そこを抜けて自室に戻ると静寂のなかアートと共に体と心を休める。備え付けのブルートゥーススピーカーで好きな音楽を流すのもいい。それはホテルというより、たしかにゲストルーム、もっと言えば欧米にあるアーティスティックなアパートメントの一室に戻ったような気持ちにもなる。この感覚を裏付けるようにゲストは欧米から訪れる方も多く、非常に好評とのことだ。

このホテルをチェックアウトし、自分の家へと帰ったときには部屋にアートを置きたくなる。そんな気にさせてくれるホテルだ。

飾られるアートは部屋によって変わるだけでなく、階によって廊下に飾られている作品も変わっていく。2回目からは別の部屋や階をリクエストしてみるのも良いだろう。立地として繁華街への利便性も高い。

アートコレクターの客室に宿泊する好奇心

部屋によっては複数のアーティストが飾られている。1階のギャラリーにある作品は個展も行われ、購入も可能な場合もあるので、運命的な出会いがあるかもしれない。

node hotel
京都市中京区四条西洞院上ル蟷螂山町 461
☎ 075-221-8800
https://nodehotel.com/